

広町の人々のために

大林源蔵と大新開の工事

昔、広町に大林源蔵という庄屋 村の人の世話をする役人 がいた。源蔵とその子どもたちは、広村の人々の生活がすこしでもよくなるように、細かいところにも気をくばりながら、たくさんの仕事を行ってきた。中でも、大新開をつくるという大きな工事に力をいれた。

今年もこれっぽちしか米が取れんかった。」

「生けんめいにはたらいても、たったこれだけか。」

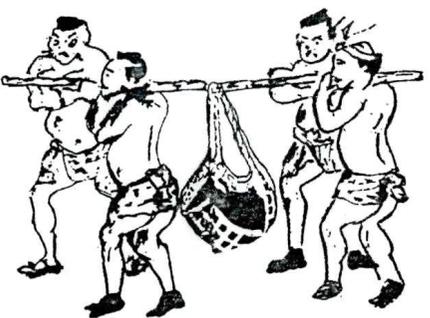
「これじゃあ、今年もたりんのう。」

毎年のようになげく人々の様子を見て、源蔵は日ごろから、もっと広い田畑があればと思い、海をながめながら、埋め立てて大新開をつくることを考えていた。そこで、大新開をつくるきよかを広島藩にもとめた。しかし、藩からは何も返事なかった。

それでも大林源蔵はあきらめないで、何度もおねがいをした。やっとおゆるしがでたのは、一年半たってからだ。しかし、藩の工事責任者になった鈴木左源太という人は、広村にはあまり来ることがなかった。それでは工事ができないので、源蔵は、片道半日がかりで何度も広島島に向き、工事の打ち合わせをしなければならなかった。

二年後、やっと工事が始まった。海へ石や土俵を投げこんで、ていぼうをきずいていく工事が一番大へんであった。源蔵は、しおどめ工事という最もむずかしい仕事のしき者をするようになった。そこで、源蔵はどうすれば工事がうまくいくか考えた。

広わんの様子をだれよりもよく知っている源蔵は、潮のひいている夜中のうちに、海水をせき止める所に、数百個の土俵を投げこむことにした。ずっしりと重い土俵を運ぶ作業は思ったいじょうに大へんだった。



もっこかつぎといって土を運ぶ様子

重いろう。ひもがかたに食いこんでいたいわい。」

つかれて、力が出んわいや。」

源蔵も工事をした人々もふらふらだった。もっこをかついだかたの皮がむけ、手や足のうらにはまめができてはれていた。

「これをしといたら、あすからの作業がうまくいくけん。がんばろうや。」

源蔵は、自分を信じてはたらいてくれる人々を上げましつづけた。やがて、夜が明けると、しおどめ工事をいっせいに始めた。源蔵のしきする工事は、夜中に土俵をしずめておいたおかげで、その上に土をかぶせて、早く工事を終えることができた。

しかし、他の場所は、うまくいかなかった。土を海に投げこんでも海の水がその土をどんどん押し流していくのだ。

おい、みんな手伝おうや。」

自分のところは終わったじゃないか。もう、動けんわい。」

でも、全部が終わらんによあ、ていぼうはできんぞ。」

源蔵は、人々をせつとくし、一人一人を海の中にずらりとかきねのように立たせた。

すごい波じゃ、しっかり立つとらんと流されるぞ。」

ずっと立つとくと冷たいのう。」

そういいながらも、人々は、じつとがまんして立ちつづけた。すると、人のかきねで海の水のいきおいが弱まり、土俵や土を投げ入れても、前ほどおしかえされることが少なくなった。そのいきおいで一気に数千におよぶ土俵を投げ込んで、やっとの思いで海水をせき止めることができた。

こうして、今の中新開派出所あたりから岩樋までのいぼうがきずかれた。このていぼう工事は、二週間もかかった。

その後も、海水を追い出す門を作ったり、土の塩分を出したりするなどいろいろな工事が続いた。

大新開一たいが、青々とした田んぼになるまでには、二十年かかった。源蔵は大新開に立ち、風になびくイネの葉の音をじつと聞いていた。

